

研究ノート

大徳寺寸松庵伝来の三幅対と吉村観阿―『過眼録』を起点に―

宮 武 慶 之

趙昌筆釈迦像、狩野探幽筆江月宗玩像、同佐久間将監像の三幅対は大徳寺寸松庵に伝来したが、その後流出し、江戸時代後期になって吉村観阿の取り次ぎにより溝口翠濤が入手した。この三幅対は売立目録に所載されるが、賛文の判読は部分的にしかなされていない。この三幅対の模写が霞兄老人による『過眼録』(国立国会図書館蔵)に所載されていた。そこで本稿ではまず観阿と霞兄老人を巡る関係を絵画の所蔵という観点から明らかにする。次に『過眼録』の記載を元に三幅対の賛文、収納する箱の形状を明らかにし、観阿にとってどのような意味を持つ作品なのかを明らかにする。

一 はじめに

『文化情報学(第十二巻第二号)』では木下長嘯子筆松永貞徳宛消息「十六夜の文」(個人蔵)について論じた⁽¹⁾。本作品は吉田幸一(一九〇九―二〇〇三)による『文学論藻(四八号)』で紹介される著名な作品であったが、その後は所在不明であった。しかしながら最近の調査により所在が判明した。箱墨書は江戸時代後期に江戸で活躍した町人数寄者吉村観阿(白醉庵/一七六五―一八四八。以下観阿に統一。)によるもので、箱側面には新発田藩主溝口家の蔵品にみられる「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印があることを確認した。また本作品は溝口家の所蔵した掛物の蔵帳

である『御掛物帳』(新発田市立歴史図書館蔵)に所載される。

溝口家が入手した時期は、観阿と親しく交流した新発田藩十代藩主溝口直諒(翠濤/一七九九―一八五八。以下翠濤に統一。)のときである。

近代の茶道史家である高橋箒庵(義雄/一八六一―一九三七)は『近世道具移動史』(慶文堂、一九二九年)で、翠濤が観阿の目利きと取り次ぎにより、多くの優れたコレクションを形成していたと紹介している⁽²⁾。

『文化情報学』では観阿が取り次いだ作品であり、かつ溝口家伝来とする作品として趙昌筆釈迦像、狩野探幽筆江月宗玩像、同佐久間将監像の三幅対を紹介した(図1)。



図1 趙昌筆「釈迦像」、狩野探幽筆「江月宗玩像」、「佐久間将監像」
 (『東都寸松庵主所蔵品』より)

ここで改めて三幅対について触れておく。本作品は北宋時代の画家趙昌の筆とされる釈迦像、江戸時代初期に活躍した狩野派の画家狩野探幽(一六〇二―一六七四)による江月宗玩(一五七四―一六四三)、佐久間将監(寸松庵/一五七〇―一六四二)の寿像を加えた三幅対であり寸松庵に伝来した作品である。寸松庵とは『原色茶道大辞典』(淡交社、一九七五年)によれば「将監が元和七年(一六二二)に大徳寺龍光院内に創立し、寛永十九年(一六四二)に西北の新天地に移った茶室である。(中略)天保五年(一八三四)の火災に焼残り、明治十二年(一八七九)取

壊されることになったのを石山子爵の手で茶室とともに東京へ移され、

やがて高橋箒庵邸に移建され大正十二年に消失した」と紹介される。⁽³⁾

この三幅対について門脇むつみ氏は「佐久間将監の肖像」で「当初からこの三幅対で寸松庵什物、それも庵の本尊に相当するものとして制作されたことが分かる。(中略)仏画と自分たち(将監と江月)の肖像画をあわせて三幅対とし、子庵の本尊のように扱うという意識が認められることは誠に興味深い」としている。⁽⁴⁾ また、同氏は「龍光院ゆかりの絵画(二)」で松花堂昭乗筆「十六羅漢図」に注目し、文化八年(一八一二)に寸松庵蔵資料を書写した『紫野大徳寺明細記』にある寸松庵について次のような記述があると紹介している。

江月和尚像
 仏祖 釈迦文仏像 探幽斎一筆
 寸松庵殿像
 仏祖脇小襖十六羅漢像 松花堂筆

後述する売立目録の図版から江月像の自賛に寛永十一年と書かれている点に注目し、脇小襖の制作年代をその頃か、もしくは寸松庵の創建当初の頃であるとの見解を示している。⁽⁵⁾

本稿で注目する三幅対についてはすでに門脇氏が『寛永文化の肖像画』(勉誠出版、二〇〇二年)で現在の所在は不明としながらも、二件の売立目録に所載されていると報告している。⁽⁶⁾

この二件の売立とは、明治四十五年五月二十七日に京都美術倶楽部で開催された東都寸松庵主高橋箒庵の売立、大正二年(一九一三)六

月十四日に大阪美術倶楽部で開催された宅徳平（醸春軒／一八四八―一九三二）による第二回の売立である。

それぞれの売立目録での表記をみると『東都寸松庵主所蔵品』では

趙昌釈迦 左探幽江月和尚像 右同佐久間將監像 三幅対
江月自作彫字箱 外箱白酔庵 江月外題 寸松庵伝来品⁽⁷⁾

『堺市宅醸春軒所蔵品入札（第二回）』では

趙昌釈迦 左右探幽江月和尚佐久間將監像 江月賛 江月外題 三幅対
江月自刻箱書付 白酔庵外箱 寸松庵伝来 竪二尺三寸二分
巾一尺一分⁽⁸⁾

と記載される。

三幅を収納する箱には江月によるとされる自刻の箱があり、外箱には観阿による書付があることがわかる。また作品の寸法も把握できる。なお箱および外題については醸春軒の目録に所載されている（図2）。

ところで『御掛物帳』の「雑之部」には次のような記述がある。



図2 三幅対を収納する箱（『堺市宅醸春軒所蔵品入札（第二回）』より）

左江月探幽筆
一 三幅対中釋迦趙昌二中傳
右佐久間探幽筆⁽⁹⁾

作品の内容から、売立目録所載品と同定される。したがって本品は溝口家伝来品であると判断され、『文化情報学』では観阿が溝口家に取り次いだ作品であるとした。

その後、筆者は吉村観阿研究のため、関係する人物の記録を博搜する過程で、霞兄老人（一八〇〇生、没年不詳）による『過眼録』（国立国会図書館蔵）に注目した⁽¹⁰⁾。同書については影山純夫氏が『茶の湯文化学会報（第三号）』で紹介しており、筆者は霞兄老人で、寛政十二年（一八〇〇）に生まれた人物で、晩年は江戸両口に住していた人物であるとされる。ただし没年については明らかにされていない。霞兄老人は吉村観阿や酒井抱一（一七六一―一八二八）と共に茶会に参会し、西村藐庵（一七八四―一八五三）の茶会にも招かれており、江戸時代後期の茶の湯文化研究資料として貴重であるとしている。同書には茶会の記録のほか、実見した道具の見聞録も含まれる⁽¹¹⁾。

『過眼録』を資料として活用した玉蟲敏子氏は『都市のなかの絵』（二〇〇四年、ブリュッケ）で、『過眼録』第三冊目「□卯過眼録」に「冬木所持八橋屏風落款」として「青々光琳」、「法橋光琳」の二署名と杜若の花三個が縮写されていることを紹介している⁽¹²⁾。

本書の成立年について影山氏は文政三年としているが、玉蟲氏は第一冊の「甲寅」を寛政六年とするのも可能との見解を示した。また第三冊の表題にある「□卯」は損傷部分のわずかに残された墨痕により「乙卯」

と判読可能であると指摘し、寛政七年もしくは文政二年であるとの見解を示している。⁽¹³⁾

『過眼録』の第四十四巻に趙昌筆釈迦像、狩野探幽筆江月宗玩像、同佐久間将監像の三幅対の賛文および顔容、箱のプロッタージュが所載されていることを確認した。

観阿については、これまでその行状を明らかにしてきたが、八十賀茶会で使用した狩野山楽画三宅亡羊賛「福祿寿」（個人蔵）以外に、所持した絵画を明らかにできていない。本稿で論じる三幅対も観阿の所持品と考えられる。『過眼録』を起点として本作品を解明することは江月および将監像の肖像画研究はもとより、当時の観阿の絵画をめぐる状況や、観阿にとってどのような意味を持つ作品なのかを解明する上で有用と考えられる。

二 観阿および霞兄老人と絵画を巡る関係

観阿と霞兄老人の関係に注目するとき『過眼録（第三十五巻）』をみると開催年未詳であるが十一月十九日に観阿、抱一、霞兄老人、福田竹軒とともに茶会に参会しており、抱一存命中より観阿と霞兄老人は面識があったことが知れる。また同書第三十三巻には観阿の所持した宗薫（今井宗薫か）の短冊が図入りで所載されており（図3）、霞兄老人が実見していたことが知れる。そこで観阿と霞兄老人と絵画の関係に着目し、その周辺にあった人物との交流に注目する。

i) 観阿の場合

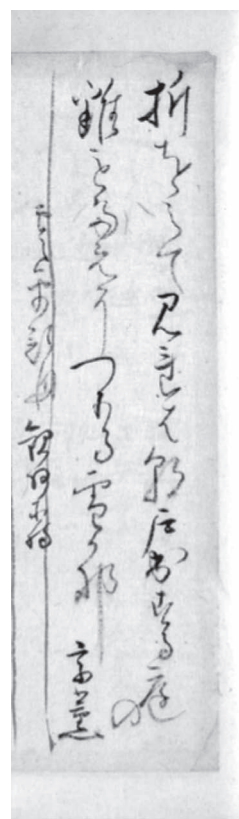


図3 観阿所持の宗薫筆短冊

文政八年七月十三日、抱一による句集『句藻』「隣家鷺」に烏丸光廣（一五七九—一六三八）の法要に関して次のような記述がある。

今年七月十三日洛の法雲院より烏丸光廣卿の御像を蘭腕先生にたのみうつしもとめて遠忌の心なす、了伴、観阿、担斎など来り侍るつる鴨とわきまへかぬる鳥の跡みのりの雲にはらし給へや

京都法雲院より光廣の肖像画を取り寄せ、蘭腕に写させた肖像を用いて遠忌の法要を行なっている。この法要には抱一のほか観阿や古筆了伴（一七九〇—一八五三）、檜山義慎（担斎／一七四〇—一八四二）以下、担斎に統一。らと共に出向していることが知れる。さらに抱一と観阿をめぐっては遡ること文化十四年（一八一七）に、観阿が俊乗房重源（一一二一—一一二〇六）の「法華勸進状」（東大寺蔵）を東大寺に寄進し勸学院内に寿蔵を建てるが、その墓題を抱一が書いており、親しく交流したことがわかる。

観阿と了伴を巡っては、了伴が所持していた大燈国師墨蹟「日山之賦」(MIHO MUSEUM蔵)や額「聾」を翠濤に取り次いでいた。⁽²¹⁾

ここでは観阿と担斎の関係について注目する。担斎は天保十年、狩野永納（一六三一―一六九七）を顕彰することと自身の古稀（七十賀）を兼ねて江戸の浅草寺山内日音院を会場として思功供展画会を開催した。なお本稿では便宜上、展画会に統一する。この展画会には担斎の知友が、永納編纂による『本朝画史』所載の画家の作品を中心に持ち寄り展示された。その出品者と作品名を記し、同年秋に刊行されたのが『思功供展画目録』（東京都立中央図書館蔵）である。そこには八十七点の作品名とその出品者が記載される。

そこで『思功供展画目録』をみると

観音影啓書記画 吉村 白醉庵蔵

との記述がみられ、展画会当日、観阿は出品者として参加したことがわかる。氏名の表記が吉村となっている。従来、東大寺勸学院の寿蔵に没後追加された碑文中、次のような記述がある。

観翁俗称芳村、本吉村也、先考嘗以財徵聘于仙台侯、侯之先君

有諱吉村公、以吉芳国読同換之云⁽²²⁾

観阿の父が仙台藩第五代藩主伊達吉村（一六八〇―一七五二）に財用で関係したため憚って吉村から芳村に改めた。筆者の研究では『日本研究（第五十四集）』（二〇一七年）で、天保十三年に吉村と署名していることを明らかにしたが、天保十年の時点で、すでに吉村と名乗っていたことがわかる。観阿自身が芳村と署名している作品では文化十四年

（一八一七）に東大寺に寄進した「法華勸進状」に

武州江戸

芳村氏観阿

との自署が確認できる。⁽²⁴⁾この点から、天保十年までの間に元の吉村に改めていたことがわかる。

また『思功供展画目録』の出品者には

芸阿弥画猿猴 白醉庵男 吉村信軸蔵

とあり、信軸は観阿の息子（弥山）である。

これまでの筆者の研究では『日本研究（第五十四集）』で法隆寺円明院に観阿が寄進した弘法大師額箱（図4）には観阿と妻子の朱漆書があることを明らかにした。箱には次のような朱漆書がある。

天保壬寅秋造此額箱以寄附

東都

白醉庵

吉村観阿（花押）

同 観勢女

同 信軸（花押）

漆工 貞次⁽²⁵⁾

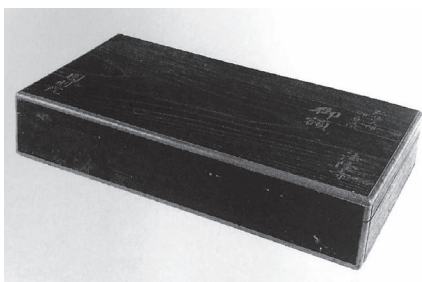


図4 弘法大師額箱（法隆寺蔵）
（『法隆寺の至宝（第14巻）』より）

この箱は天保十三年に観阿と妻観勢（田鶴）、息子の信軸らが寄進したものである。今回、観阿親子は天保十年に思考供展画会への出品が確認することができた。

観阿は室町時代中期から後期にかけて活躍した賢江祥啓（啓書記／生没年不詳）による観音像、信軸は室町幕府の同朋衆であった芸阿弥（一四三二―一四八五）による猿猴図を出品している。担斎を巡る人物の中で観阿と息子信軸の名前が見出せることは、両者が当時の江戸で絵画の所蔵家として相当の位置にあった人物と考えられる。

このような観阿親子と担斎の関係について検討するとき、朝岡興禎（一八〇〇―一八五六）による『古画備考』（東京藝術大学附属図書館蔵）にも注目したい。同書巻二十下（名画八下）には室町時代後期に活躍した臨済宗の僧周徳（生没年不詳）の画歴と印譜が紹介される。紹介される作品のうち梅図の賛（図5）がみられ、小書には次のような記述がある。

周徳

倒懸梅花、墨

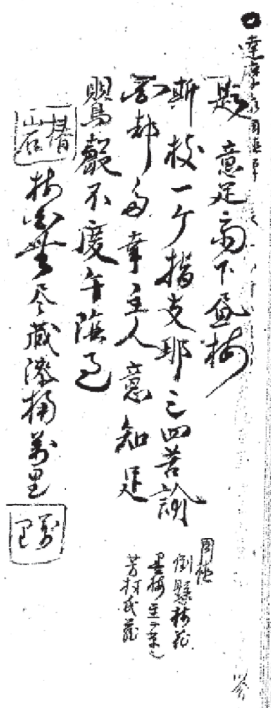


図5 周徳筆「梅図」の賛
（『古画備考（巻二十下）』（東京藝術大学附属図書館蔵）より）

描至テ草也
芳村氏蔵⁽²⁶⁾

また同書の巻二十三（名画十一）には三谷信重（雲澤等悦とも／一六七五没）の山水図について次のような記述がある。

陶淵明図横向也、有侍童步行、墨画小立物、天保三三、内藤氏ニテ見、

印 印 芳村氏山水ヨリハ劣、

雪舟流モ、直ニ不見芳

村ノ牛ハ、養澤ナリ、

三谷 トノミ印⁽²⁷⁾

以上の記述から、当時の芳（吉）村氏が周徳の梅花図と、三谷信重の山水図を所持していたことがわかる。

ところで『思考供展画会』をみると出品者に木挽町狩野家があり、この人物は興禎の兄である狩野養信（晴川院／一七九六―一八四六）である。担斎と晴川院の直接的な関係がみられる一方で、観阿と晴川院との関係を巡っては観阿八十賀の前年となる天保十四年に、溝口家で翠濤、小堀正優（宗中／一七八六―一八六七）、晴川院にそれぞれ福祿寿、賛、鶴亀の合作を所望していた⁽²⁸⁾。なおこの作品は『朝吹氏野崎氏藏品入札』に図版が所載される（図6）⁽²⁹⁾。

『古画備考（巻二十下）』が書かれたのは嘉永五年亥三月十九日以降、同書巻二十三は嘉永四年辛亥三月二十四日以降である。観阿は嘉永元年

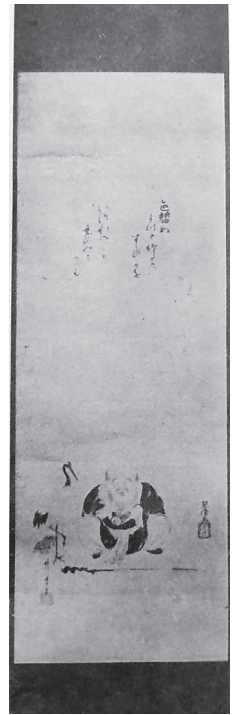


図6 翠濤、宗中、晴川院合作「福祿寿」(『朝吹氏野崎氏蔵品入札』より)

に没していることから、これらの作品を生前の観阿、もしくは観阿没後に信軸が所持していたと考えられる。この点から観阿は翠濤などに道具の取り次ぎを行う美術商であり、また絵画の所蔵家でもあったことがわかる。

ii) 霞兄老人の場合

嘉永五年、亀戸天神で開催された行事について喜多村信節(一七八四―一八五六)による随筆『さこのまにまに』^(原文ママ)の同年閏三月十五日条(実際には二月十五日条)に注目してみると次のような記述がある。

○十五日、向島花は過たれ共人は多く出しと也、亀戸開帳も来ル廿七日限りと云、当年天満宮九百五十年二付、所々天神開扉有、平川ハ奉納物多し、亀戸ニハ当日古筆了伴催にて諸家珍藏の菅神御筆、又古筆の尊像を借集て展観をなす⁽³⁰⁾

同年三月十五日、菅原道真(八四五―九〇三)の九百五十年遠忌を記念し亀戸天神において、了伴により諸家珍藏の菅神像などを借り集めて展観が催された。この催しについて同書では

此催実ハ天神橋手前に堀大蔵殿思ひ立にて、了^伴範に任せ行たる事也

とあり、天神橋手前に住む堀大蔵の発案であり、了伴が一任されていたことがわかる。この書画会に出品された作品の目録が「亀井戸天神展覧会目録」である。この目録は現在、日本大学総合学術センターが所蔵する『寺社縁起(正編続編)』に所収される。同書には次のような記述がある。

青蓮院 尊円 神号 廉嶋
同 尊朝 同 霞兄⁽³¹⁾

能書で知られた青蓮院尊朝(一五五二―一五九七)による神号を出品した人物として霞兄の名前が確認できる。『過眼録(第三十四卷)』には了伴が収蔵した雛屋立圍(野々山立圍/一五九五―一六六九)による三幅対が図入りで所載されており(図7)、交流があったため実見したと

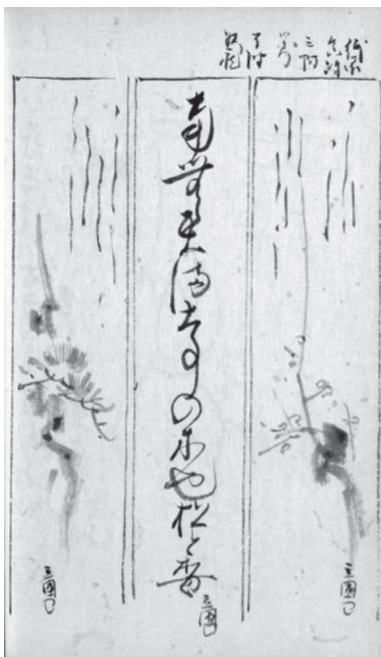


図7 了伴収蔵の雛屋立圍筆三幅対

考えられる。この点から書画会へ出品した霞兄とは『過眼録』の筆者である霞兄老人と同定される。

『過眼録』に所載される茶会のうち開催年月未詳であるが十一月十五日には霞兄老人、佐々木重郎、墨屋良斎と参会（第三十五卷）、四月十七日の中島暁河の茶会に本屋了我、梅屋鞠塙、霞兄老人、本屋吉太郎とともに参会（第三十九卷）している。霞兄老人は当時の茶の湯文化で主要な人物との交流があり、美術品の所蔵者としての一面があったことが確認できる。

墨屋良斎（生没年不詳）と本屋了我（惣吉／一七五三生。没年不詳）はともに松江藩七代藩主松平治郷（不昧／一七五一―一八一八）の元に出入りし多くの道具を取り次いでいた道具商である。梅屋鞠塙（一七六一―一八三一）はもともと仙台出身の道具商でその後百花園の園主となった人物である。

不昧の茶会で古来より著名な名物道具を使用した茶会を、近代の茶道史家である高橋竜雄（梅園／一八六一―一九四六）がまとめた『不昧公名物茶会記』（慶應義塾図書館蔵）がある。³² 同書によれば不昧が文化元年十月に開催した谷園中大茶湯で観阿は利休堂席を、鞠塙が花畑腰掛席を担当していることが知れる。また同書のうち不昧の茶会に観阿が招かれている早い時期の記録では文化元年甲子年四月二十六日（正午）の茶会がある。題には「園城寺御花入にて武者小路千宗守被召て御跡見牛尾宗苔ラ越ス」とある。この茶会は、武者小路千家五世家元千宗守（一啜齋、休翁／一七六三―一八三八）を招いた際に使用した千利休作竹花入銘「園城寺」（東京国立博物館蔵）を用いた茶会の跡見の会であり、観阿の参会が確認できる。³³

特に観阿と不昧の關係に注目すると、梅園による『松平不昧伝』（二九一七）によれば次のような記述がある。

彼が公のために提供したるもの、松栄の屏風、古銅鉢、蓬雪の額、象眼床几を始め、裂類の数々、多葉粉入、緒じめ、根付、刀劍の鏝、柄木、其他文房箱の珍品奇什殆ど枚挙に遑あらず、公はかくの如き稀世の奇士と交り、茶事を共にし、文芸を語られたるなり³⁴

観阿が不昧に道具を取り次いでいることや、不昧が寵遇したことがわかる。観阿と墨屋および本屋をめぐっては不昧の元で交流したものと考えられ、また鞠塙と観阿をめぐっては、観阿が所持した尾形乾山（一六六三―一七四三）による陶器の薬法書を鞠塙に与えていた。³⁵

このように観阿を中心にみた場合、親しい人物のネットワークの中に霞兄老人もおり、絵画の収集と茶の湯という共通の文化ネットワークの中で交流していたことがわかる。また絵画をめぐる動きの中では、霞兄老人の周辺に抱一や貌庵のほか有力な美術商がいたことで多くの作品に触れる機会に恵まれていたものと考えられる。

三 『過眼録』にみる三幅対

『過眼録（第四十四卷）』には三幅対の箱および賛文の写しが所載される。そこで箱、極札、顔容、賛文について詳しくみていきたい。

先述の『堺市宅醸春軒所蔵品入札（第二回）』には箱の図版（図2）が掲載される。地黒の箱であることがわかり、箱には

祖師
釈迦像 三幅 寸松庵
檀那

と彫られ江月の筆跡であるとされる。そこで『過眼録』をみると箱のプロッタージユが所載されており、各頁を繋ぎ合わせたのが(図8)である。

祖師とは『新版禅学大辞典』(一九八五年、大修館書店)によれば「祖は始祖。師は師範。一宗一派を創めた開祖の意味にも、また正法を伝持した列祖の意味にも用いられ、特に菩提達磨を祖師ということもある。」と述べられている¹⁴⁾。また門脇氏の教示によれば江月自身が祖師と名乗ることはあり得ないとのことであった。本幅を所蔵した高橋箒庵はこの祖師という表記について、後述する『東都茶会記(第一輯)』(慶文堂書店、一九二〇年)では大徳寺開山の大灯国師(宗峰妙超/一二八二―一三三七)としており、当時の所蔵者でさえも疑問視していたことが窺われる。

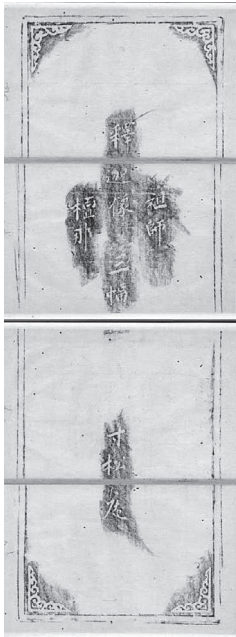


図8 『過眼録』(国立国会図書館蔵)の頁をつなぎ合わせた塗箱全景

観阿による外箱があることから、寸松庵に伝来した時期に、塗箱で保管されていたものと考えられる。

『過眼録』には三幅対を収納する箱について次のような記述がある。

面朱 彫 緑青入
地黒

箱は地黒に面取りした部分を朱漆で塗られた箱であり、江月の文字の部分は彫られて青漆で塗られている。なお箱側面もプロッタージユされ(図9)、箱の上下隅に金具が付けられ、面取りして朱漆が塗られている。また緒を付ける金具(図10)があることから箱底部分の中央左右に二箇所あったと考えられる。

この作品を収納する箱には外箱があり、そこに観阿の箱墨書があるとされる。溝口家伝来品の場合、所蔵を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印が貼られており、塗箱もしくは観阿の墨書がある外箱に貼られているも

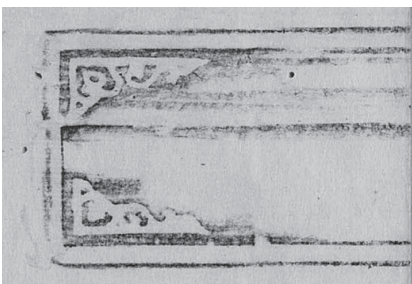


図9 塗箱側面



図10 緒を結ぶ金具

のと考えられる。

付属する外題の写し(図11)には次のように書かれている。

祖師 興宗 寸松庵 印
本尊 釈迦 寸松庵 印
檀那 宗可 寸松庵 印

外題は『堺市宅醸春軒所蔵

品入札(第二回)』の(図2)

で紹介される通り、箱に貼られている。

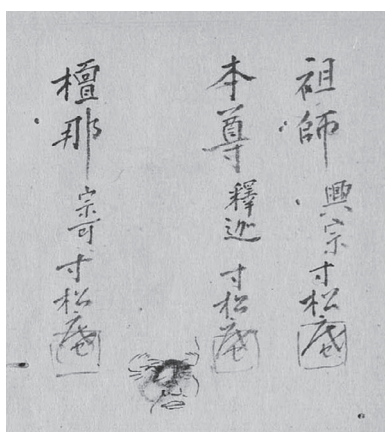


図11 外題

ここでは江月宗玩像と佐久間将監像の江月による賛に注目する。将監像の賛文は門脇氏も指摘するように『東都茶会記(第一輯)』で次のように紹介されている。

山隠宗可寿像

常磨三尺靠腰中、秘在形山将退躬、瓶裏梅花對人語、徳香吹起一松風

江月叟謾賛 書于寸松庵⁽¹⁵⁾

また江月像の賛について門脇氏は売立目録図版から次のように判読を試みている。

馬九方甄

□従来相 寛永十一載

色分明□□
兮真不真□
□□偽不偽⁽¹⁶⁾
丹青錯□□

「朱文方内円印」宗玩□「朱文方印」折脚鐘□
佛成道日

二件の目録図版の不鮮明さもあり、文字の配列がかるうじて確認することができ。そこで『過眼録』をみると将監像の賛(図12)には次のような記述がある。なお同書に記載される賛文を明確にするため該当する部分を四角で囲った。

常磨三尺

靠腰中秘在

形山将退

躬瓶裏梅花

對人語徳香

吹起一松風

山隠宗可寿像

印 書于寸松庵□印

江月叟謾賛

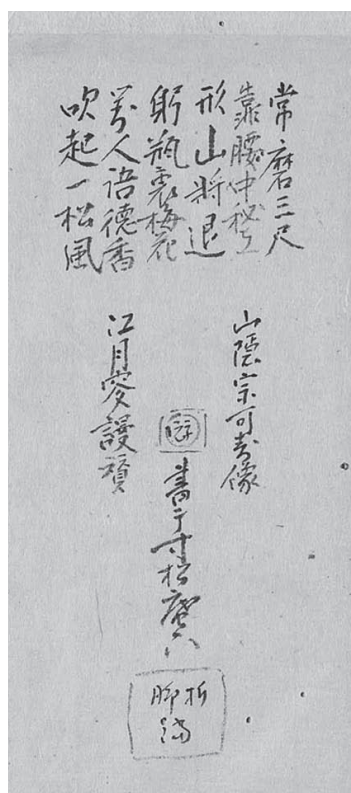


図12 佐久間将監像の賛

ところで明治三十六年四月、東京帝室博物館の特別展覧会が開催された。その作品を『特別展覧会列品目録』にみると溝口家が出品した作品として次のような記述がある。

第七二号 寸松庵主佐久間将監像 狩野探幽筆 絹本着色 一幅⁽¹⁷⁾

先出の『御掛物帳』で探幽による将監像は、三幅対の内の作品しか確認できず、特別展覧会に出品された作品とは寸松庵伝来の一幅であると判断される。将監像および江月像は同じ探幽による作品であることから絹本に描かれたことが判明する。

次に江月宗玩像の賛(図13)は次のように書かれている。

馬九方甄

處従来相 寛永十一載

色分明無用

印 江月叟自評 印

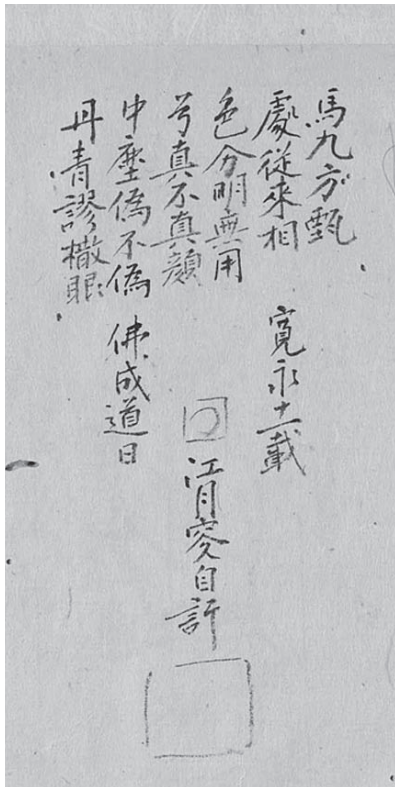


図13 江月宗玩像の賛

兮真不真顔
中塵偽不偽
丹青謬撒眠

佛成道日

この賛文が書かれたのは寛永十一年、陰暦二月十五日であることが知れる。なお印については門脇氏が将監像で指摘するように上部は朱文方内円印で「宗玩」、下部は朱文方印で「折脚鐘」と認められる。

『過眼録』には霞兄老人による釈迦像および江月、将監像の模写がある。釈迦像(図14)は親指と中指を立て部分的な姿を写している。光背や全体の姿も描かれその様子がわかる。目録の図版では衣に丸紋の金泥で描かれたと目される模様がみられるが、その部分は描かれていない。

江月像(図15)は靴を脱ぎ、衣を掛けた椅子に座した様子が描かれる。注目すべきは鼎形印が書かれている点である。なお門脇氏によればこの印形は狩野派がよく使う壺形印とは少し形状が異なり、三脚であることがはっきり分かる形であるため鼎形印が適当との教示をいただいた。このことから本紙右下部分には鼎形印が押されていたことが知れる。形状



図14 釈迦像



図 15 江月宗玩像

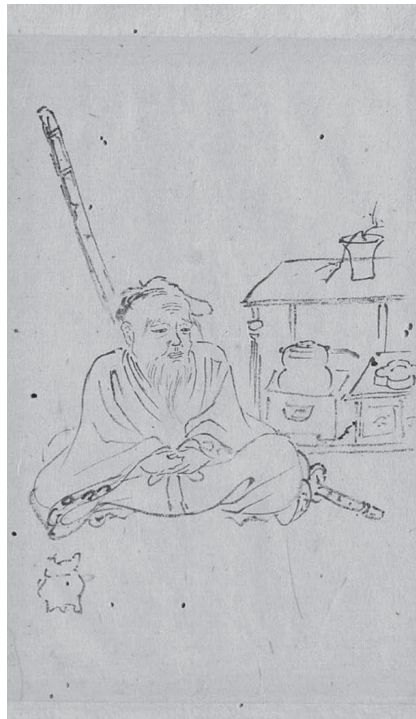


図 16 佐久間将監像

から『探幽印譜』にある印と比較したとき、最も形状が近いのは守信の鼎形印である。⁽¹⁸⁾

将監像(図16)は手を膝上で結び、半眼の姿が描かれる。傍には太刀を置き、側にある棚の下部には釜が四方の風炉(唐金で造られたのであるか)に据えられ、山水の絵が書かれた棚の上には木瓜形の水指もしくは香炉が置かれている。棚上には棒の先のような形の花入が置かれ、賛文から梅が挿れられていることがわかる。また本紙左下部には先ほど

の鼎形印が押されている。

ここで霞兄老人が三幅対を実見した時期について述べておきたい。『過眼録』において霞兄老人が溝口家の茶会に招かれた記録は確認できず、また直接、溝口家で肖像や賛文の模写および箱のプロタージュを行ったとは考えにくい。

そこで観阿と霞兄老人の関係に注目するとき『過眼録(第三十五卷)』をみると開催年未詳であるが十一月十九日に観阿、抱一、霞兄老人、福田竹軒とともに茶会に参会しており、抱一存命中より観阿と霞兄老人は面識があったことが知れる。また同書第三十三卷には観阿の所持した宗薫(今井宗薫か)の短冊が図入りで所載されており(図12)、霞兄老人が実見していたことが知れる。

寸松庵伝来の三幅対が所載される第四十四卷の題箋には「戊戌」と書かれている。同書の記載に信を置かならば、この三幅対もその時期に霞兄老人が実見したことになる。そこで干支について考えるとき、第十六卷の最終頁には

慶應丙寅仲夏初二日 霞兄老人抄録昔年六十有七

と書かれており、霞兄老人は慶應二年(一八六六)に六十七歳であることがわかる。この点より題箋にある「戊戌」として該当するのは天保九年か明治三十一年のいずれかであるが、後者の場合に霞兄老人は九十九歳となり、やはり天保九年であると判断される。⁽¹⁹⁾

四 むすび

本稿ではこれまで内容が不明であった江月像および将監像の賛文、箱の状態などを『過眼録』から明らかにすることができた。趙昌筆釈迦像を含むこれらの三幅対は寸松庵に本尊に相当するものとして納められたが流出し、その後は観阿が所持していた。

観阿はいつの時期かは不明であるが、この三幅対を溝口翠濤に取り次いだ。そのため溝口家の蔵帳に所載される。その後、これらの三幅対は溝口家が東京帝室博物館の展覧会に出品し、明治三十六年以降に高橋箒庵が溝口家との直接取引により入手し、その後は宅徳平が所持した。特に箒庵は自身が寸松庵の茶室を所蔵したこともあって、この三幅対を重宝としたと考えられる。

霞兄老人は抱一と親しくしていたが、その周辺には観阿、担斎、了伴といった人物がいた。そこでこれらの人物との関係を明らかにするため書画会の出品目録に注目した。観阿は息子信軸とともに担斎による思考供展画会への出品、霞兄老人は了伴による亀戸天神の書画会への出品をそれぞれ確認した。観阿と霞兄老人は抱一と一緒に茶会に参会すると共に、絵画の所蔵家としても両者が交流していたと考えられる。霞兄老人と観阿を巡る交流から『過眼録』に三幅対の模写が残された。その時期は『過眼録』の記載に信を置けば天保九年の出来事と考えられる。

最後に三幅対を収納する塗箱と観阿の関係した作品との共通点について述べておきたい。先述の通り、法隆寺が所蔵する弘法大師額箱は、観阿が七十八歳の時に寄進した箱である。箱は木地にそのまま漆を塗った掻合塗の技法で塗られ、面取りした部分に朱漆で塗っており、三幅対を

収納する塗箱と共通点がみられる。

このほか現在、福岡市美術館が所蔵する高麗堅手茶碗銘「雨漏」がある。茶碗を収納する塗箱には不味による歌銘が金蒔絵され、桐材による二重箱、さらにそれらを覆う外箱として金具の付いた塗箱が付属する(図17)。そこで外

箱の金具に注目すると、先にみた三幅対の収納する箱の金具に類似している。厳密にいえば、金具の外郭はほぼ同一であるが、茶碗の箱にはその外郭の中に唐草をあしらった文様がみられる。外箱には

白酔庵

所持(花押)

と書かれており、筆跡は七十歳代後半のものと考えられる。

二件の箱から七十歳代後半の時点で寺院へ寄進するための箱および自身が重宝とする茶碗の外箱という主要な作品の箱には、三幅対の箱の意匠をモチーフに用いていたと考えられ、観阿にとって三幅対は作品の重要性もさることながら、塗箱も重要な意味をもつ作品であったと結論することができる。



図17 高麗茶碗銘「雨漏」および次第(福岡市美術館蔵。画像提供同館)

謝 辞

本稿執筆にあたりご協力いただきました法隆寺、東大寺、福岡市美術館、国立国会図書館、新発田市立歴史図書館、東京都立中央図書館、東京藝術大学附属図書館、慶應義塾図書館、日本大学総合学術センター、東京文化財研究所、同志社大学今出川図書館、ご教示を賜りました門脇むつみ氏に深謝申し上げます。

付 記

・本研究は平成二十九年度高梨学術奨励基金・若手研究助成(美術史)「近世江戸時代後期の美術品と移動に関する研究―溝口家を起点に―」による。

・本稿は次の発表を一部改訂したものである。

宮武慶之「大徳寺寸松庵伝来の三幅対と吉村観阿」、茶の湯文化学会近畿例会、平成二十九年十二月九日、於同志社大学今出川校舎。

註

- (1) 宮武慶之「木下長嘯子筆「十六夜の文」―吉村観阿と溝口翠濤の関係に注目して―」『文化情報学』第十二巻第二号、同志社大学文化情報学会、二〇一七年、一一―一四頁。
- (2) 高橋義雄『近世道具移動史』慶文堂、一九二九年、一四八―一五〇頁。
同書には次のような記述がある。

溝口家は越後新発田藩主で、文政頃号を翠濤と云はれた好事の主人あり、彼の観阿白醉庵を寵遇し茶事に執心にして盛んに名器を買収せられたので、各般の什器が潤沢であった

- (3) 井口海仙、末宗廣、永島福太郎監修『原色茶道大辞典』淡交社、一九七五年、四九三―四九四頁。

- (4) 門脇むつみ「佐久間将監の肖像」『寸松庵逍遙』龍光院、二〇一三年、六二―六三頁

- (5) 門脇むつみ「龍光院ゆかりの絵画(一) 松花堂昭乘筆「十六羅漢図」『南游行』、龍光院、二〇一四年、六二頁。

- (6) 門脇むつみ『寛永文化の肖像画』勉誠出版、二〇〇三年、五一―五二頁および二一三―二一四頁。

- (7) 売立目録『東都寸松庵主所藏品』。明治四十五年。

- (8) 売立目録『堺市宅醸春軒所藏品入札(第二回)』。大正二年。

- (9) 宮武慶之「御掛物帳」にみる溝口家旧蔵の書画」『新潟県文人研究』第十六号、越佐文人研究会、二〇一三年、一五七―一九一頁。

- (10) 霞兄老人『過眼録』国立国会図書館蔵。
なお国立国会図書館デジタルコレクションで公開されており閲覧可能である。

- (11) 影山純夫「過眼録」と酒井抱一」『茶の湯文化学会報(第三号)』、茶の湯文化学会、一九九四年、三頁。

- (12) 玉蟲敏子『都市のなかの絵―酒井抱一の絵事とその遺響―』ブリュッケ、二〇〇四年、八二―八三頁。

- (13) 前掲注(12)。
- (14) 前掲注(12)。玉蟲敏子『都市のなかの絵―酒井抱一の絵事とその遺響―』、

四九一頁より再引用。

- (15) 宮武慶之「白醉庵・吉村観阿について」『日本研究』第五四集、国際日本文化研究センター、二〇一七年、三九一七七頁。
- (16) 中野三敏、菊竹淳一共編『相見香雨集(四)』青裳堂書店、一九九六年、二八八―三〇一頁。
- (17) 前掲注(15)。宮武慶之「白醉庵・吉村観阿について」。四六一―四八頁。
- (18) 前掲注(15)。宮武慶之「白醉庵・吉村観阿について」。四四一―四六頁。
- (19) 前掲注(18)。
- (20) 朝岡興禎、太田謹補『古畫備考』中巻、思文閣出版、一九七〇年、七二―頁。
- (21) 前掲注(20)。『古畫備考』中巻。九〇―九頁。
- (22) この作品は大正三年三月二十九日上野国華俱樂部で開催された福祿寿会で溝口伯爵家が出品していた。見聞した箒庵によれば次のような記述がある。
- 同家出品の狩野伊川院が鶴を画き、溝口家の祖先翠濤侯が福祿寿を画き、其上に小堀宗中が色かへぬ松と竹との末の世を何れ久しと君のみそ見むの賛を書きたる者は、是れ亦固より小品なれども茶人の喜ぶべき洒落幅なり
- (23) 朝吹英二(紫庵／一八四九―一九一八)と野崎廣太(幻庵／一八五九―一九四二)は大正九年四月二十二日、東京美術倶楽部で売立を行なっており、その目録が『朝吹氏野崎氏藏品入札』である。同書には次のような記述がある。
- 六〇 晴川、溝口公合作 福祿寿鶴亀 宗中賛 宗中箱書
 竪二尺八寸四分 幅一尺
- (24) 喜多村信節『きこのまにまに』(三田村鳶魚編『未刊随筆百種』第十二巻所収、臨川書店、一九六九年)、一六九―一七〇頁。
- (25) 「亀井戸天神展覽会目録」『社縁起』正編続編、日本大学総合学術センター蔵。
- (26) 『不昧公名物茶会記』慶應義塾図書館蔵。請求記号二〇八・二二・一および二〇八・二二・二。
- (27) 当日、参会した客は順に山口長三郎、大坂屋庄三郎、芳村観阿、筑前屋作右衛門、牛尾宗吾、伏見屋宗振となる。
- (28) 高橋梅園『茶禅不昧公』宝雲舎、一九四四年、二二〇頁。
- (29) 鈴木半茶「五代乾山西村藐庵(三)」『陶説(第五十七号)』日本陶磁器協会、一九五七年、五二頁。
- 鞠塼は文政二年前、隅田川焼の開窯を記念して「すみた川花やしき」として半紙八丁を発行し、都鳥の香合を配った。この案内には花屋敷全図四丁が書かれ、花屋敷全図の西北隅に乾山窯が書かれている。図には次のような記述がある。
- 梅屋園中、倣乾山窯、隅田川以土陶器製始、抱一上人依命、光琳碑妙顯寺建因縁ニヨツテ、陶器ヲ製スル薬法ハ光琳家ヨリ譲受、亦伊八乾山ノ薬法ノ直書ヲ浅草観阿雅君ヨリ譲受所持ス
- (30) 駒澤大学内禅学大辞典編纂所編『新版禅学大辞典』、大修館書店、一九八五年、七六―九頁。
- (31) 高橋箒庵『東都茶会記』第一輯上巻、慶文堂書店、一九二〇年、一〇六頁
- (32) 前掲注(6)。門脇むつみ『寛永文化の肖像画』。二二四頁。
- (33) 東京帝室博物館『特別展覽会列品目録(明治三十六年)』、一九〇三年、八頁。
- (34) 『探幽印譜』風俗絵巻図画刊行会、一九二〇年。
- (35) 三幅対が所載された時期は、『過眼録』記載順に従えば、前後の作品の書かれた時期から考え天保九年七月から同年九月の間であると考えられる。
- (36) 観阿の花押の変化については前掲注(1)を参照されたい。